

(1)異常気象が続く

梅雨明けと共に連日酷暑が列島を覆い尽くして、農作物への影響が心配されていますが、世界に目を向けてみると各地で豪雨や早魃などの異常気象が相次いで襲ってきています。ロシアでの記録的な猛暑と少雨や中国での豪雨続き、南米での大寒波もあって、夫々の市民生活の混乱と経済損失が巨額にのぼっていると報じられています。こうした熱波や寒波は大気上層の偏西風が大きく蛇行するなどの異変がもたらしたものと云いますが、これから以降は太平洋東部熱帯域でのエルニーニョ現象がラニーニャへ変わり、更に異常気象の多発も心配されると云われています。

既に中国の豪雨では農作物への被害も深刻で、直接被害が1兆8000億円に達して、秋収穫の作物への影響が懸念されており、又ロシアの早魃被害からは小麦の国際価格水準の高値推移が見込まれるようになってきています。日本国内でも春先の低温や梅雨時の集中豪雨などの影響は、今出回っている青果物の価格動向を大きく変えているばかりでなく、生育途中の野菜・果実に対しても病虫害の発生や収穫減の恐れなど肥培管理の上で留意しなければならない状況が心配されています。

こうした異常気象の頻発は地球温暖化現象の一つとして見なければならぬのではないのでしょうか。地球温暖化の話題は騒がれている割には、中・長期のものとして身近に感じられない面が無い訳ではありませんが、気候に対する適応性の巾が狭い果樹園芸などは影響が早く大きく出てくるのではないのでしょうか。ミカンや桃、さくらんぼなど出回りが遅れた割りに価格のとれなかったのは、着色が進まないままの収穫遅れ、そして果肉軟化など品質が伴わないのではなかったのかなどと勘繰ってもみたくになります。

地球温暖化がらみでみると、冬春期の青果物は施設栽培に伴う諸費用の軽減や生育の前進化などプラスに作用される面もありますが、夏秋青果物にとっては生育のステージごとに従来とは異なる対応を求められることも考えなければならぬでしょう。消費の面ではその折々の状況でしか騒がれない傾向がありますが、事態は一過性のものとして安易に対処出来る話題ではないと思います。特に作る側売る側からは常に意識して行かなければならないのではないのでしょうか。

(鈴木重雄筆)